

渡部 さとる×千葉桜 洋 トークイベント 20180525（金） 銀座ニコンサロン19時～20時

司会／

本日は手話通訳とUDトーク（音声認識）がごさいます。
UDトークは、話した内容をリアルタイムに文字にすることができます。
また日本語を英語に翻訳することも可能です。渡部様と千葉桜様のお話の内容を、こちらのリアルタイム文字表示を利用して内容を深めていただければと存じます。多少の誤変換もごさいますが、誤変換したところは修正をしていきます。

渡部／

ここでちょっとお知らせとして、今回展示と同時に写真集を販売しております。
1冊2800円です。数を確認するため領収書を出しておりますので、もしお名前が必要な方は申してください。おそらくこのトークイベントが終わった後、ちょっと混雑が予想されますので、よければ今のうちにお買い求めくださいということです。

この写真集はですね、なんでしょう。こんなこと言うのもなんですけども、後であれ買っときゃよかったなってなります。おそらくですけど、なんかいけるんじゃないかなっていう感じがしております。何であの時買わなかったんだ？って絶対思うものになります。あんまりこういうことを言う方ではないのですが。本人としては残っちゃったらどうしようと思っていますけども、この本は多分かなり速い足でなくなるような気がしております。ぜひ、この機会にお求めくださいということです。

もうしばらくしたら始めたいと思います。

千葉桜／

こんばんは。聞こえますか？私は今回お話する千葉桜です。
私自身耳が聞こえないので、手話通訳と、日本語字幕は音声認識に加えてバッククヤードにいる人手による修正反映させた文字が出ています。英語字幕の方は自動翻訳です。聞こえない方々に貸し出している眼鏡端末は、このスクリーンに映っている文字がそのまま眼鏡上にも出てきます。こんな形で進めます。

あともうちょっとしたらトークを始めます。

司会／

皆さん、こんばんは千葉桜洋のトークイベントをこれから開催します。
お相手は、師匠に当たります。写真家の渡部さとるさんです。
渡部さとるさんと千葉桜 洋さんのトークイベントです。
では、お聞きください。

渡部／

渡部さると申します。

千葉桜さんと4年ほど前から、写真の方でお付き合いをしております。

今日はですね、彼が写真をやっていることを知らない方も多いと思いますし、今回初めての写真展であり、写真集の制作でもあったので、一体どういう形でこれが作られたのかということ、彼の背景を通して探っていきたいと思います。

よろしく願いいたします。

ではですね、まず本人についてから続いてちょっとお話を聞きたいと思います。

まず、何歳？

千葉桜／

52歳です。

渡部／

職業、今は何している？

千葉桜／

情報通信の会社員です。

渡部／

写真はいつから始めている。

千葉桜／

本格的にやったのは、高校のときに登山を始めて、その時に一眼レフカメラを買って自分で撮り始めたのが始まりなのかなー。

渡部／

耳が聞こえないということだったんだけど、これは生まれつき？

千葉桜／

いや、生まれたときは聞こえていたみたいです。

私は親がアメリカのニューヨークにいるときに生まれたんです。

向こうの病院で私が生まれたときが1966年。

渡部／

まだ海外渡航が一般的ではなかったときの話ですよ。

千葉桜／

その病院で生まれた時の聴覚検査では大丈夫とのことで、その医師の証明書は持っています。その後、日本に帰ってしばらくして2歳半ぐらいに、どうも聞こえないのではということ、いろいろ調べてみたら聴覚障害があることが分かった。

振り返ってみると、アメリカにいる乳幼児の時期におたふく風邪にかかって高熱状態になったことがあって、あのときに聞こえなくなったのかなと思われています。

渡部／

じゃあ、どうやって、その今の言葉を獲得したの？

千葉桜／

私の両親の考え方では、口話がいいとなって、その訓練をする学校が東京の町田にあったので、大阪からわざわざ引っ越しして通いました。その訓練では補聴器も使って発音して

みて相手が喜んだときの振動や口の形のパターンを覚えていく方法で、すごく時間がかかりました。

渡部／

聞こえないことでちょっと誤解していたんだけど、無音ではないんだよね。

千葉桜／

補聴器かければ、音は辛うじて一応入ります。

ただ音は入るけど、何を言っているのかまで聞き分けるのが大変なのです。

また補聴器を外すと全く聞こえない状態です。

私自身耳が疲れていると補聴器を外すこともよくあります。

渡部／

子供時代はどんな感じ？普通の子供たちと一緒に遊んでいたのかな？

千葉桜／

私の場合は、先ほど話した口話訓練学校から普通の幼稚園に行っていました。

それは小学校以降も同じでずっと普通の学校に通っていました。ただ私自身言葉をどうにか話せて読み書きできるようになったのは小学校の高学年くらいです。

渡部／

全部じゃないけれどもちょっとずつ言葉を身につけられるようになってきたのですね。

高校時代は何していた？部活とかは？

千葉桜／

高校の時はラグビーをやっていました。

渡部／

スポーツやっていたんだね。

千葉桜／

もともと私は小学校中学校でサッカー少年だったんですよ。

ずっとサッカーばかりやっていたよ。

渡部／

そのときに何か影響を受けたものって何かある？

本とか映画とか、映画は・・・あっても字幕があれば映画も見られるのかな。

千葉桜／

実は私は映画から多分に影響もらっています。

テレビのドラマとかは当時字幕が全くなかったので分からなかった。

NHK3チャンネルの洋画劇場があったのを覚えていますか？

これだけ日本語字幕がベタでついていました。

それを小さい頃からずっとひたすら見ていました。

渡部／

その字幕を読むようになるのが目標でもあったのかな。

千葉桜／

はい、漫画や絵本も含めて文章が読めるようになることが日課でした。

渡部／

何か覚えている映画とか、ある？

千葉桜／

チャップリンが一番覚えています。

千葉桜／

無声映画で字幕なしで楽しめたので。親や兄弟と一緒に同時に笑えたのが嬉しくて。この映画の時は字幕を読み取る訓練も必要なかったのでリラックスできて。他はバスターキートンとか。ただあんまり子供用の映画はなくて、大人向けの映画とかも見ていました。

渡部／

なんか今回のタイトルがちょっと面白いんだけど、これはどんな経緯で？

千葉桜／

「指先の羅針盤」ですか。

息子が指をカクカク動かすので、まず「指先」が思い浮かんで、それに続く言葉をずっと考えて悩んでいる最中に本棚を眺めていたら、大好きな小説家梨木香歩さんのエッセイ本「不思議な羅針盤」という背表紙文字が目に入った。それで並べてみたら、とてもしっくり来てよかったので。

渡部／

息子さんが被写体になっているわけだけど、ちょっと息子さんについて教えて。

千葉桜／

私の息子は・・・自閉症って皆さんご存知ですか？引きこもりとか思われそうですが、脳機能障害で独特の感じ方や世界観を持っています。

渡部／

自閉症って何ですかって聞かれても・・・初めは、実はちょっとよくわかっていなかった。

千葉桜／

見た目は確かに普通に見えますし。

渡部／

この展示にある写真だけを見ると、なんか独特の雰囲気はあるかもしれない。

千葉桜／

写真だけを見ると、どこに問題があるのか分からないですよ。

一つ言えることはすごいこだわりがあって、例えば水を見ると手でピチャ、ピチャやらざるを得ない性分で、うちの家の廊下とかは水ピチャピチャでフローリングはいつもバタついていたりしています。

他にもいろんなこだわりがあって一緒に生活するとぶつかっちゃうことも多いです。

あともう一つ、知的障害も併用していて、今年18歳になるのですが、知的レベルは3歳ぐらいです。

渡部／

旅行とかにも一緒に行くの？

千葉桜／

もともと、私もかみさんも世界あちこち旅するのが好きだったので、どこかいていないとストレスがたまるんです。でも息子は変化が苦手なので初めは大変だった。当時は旅館やホテルに泊まることも難しかったので、キャンピングカーみたいな車で道の駅とかキャンプ場に泊まる、そういう形でのツーリングという感じでした。

今では逆に息子さんの方が外に出たがるようになっています。

千葉桜／

私の場合、まず一人で写真を撮りに出かけられないのがあります。私は会社員なので、息子も学校が休みの土日の付き添い道中で、写真を撮るスタイルになっています。

こうして息子の後をついて行って、思わぬ場所で突然息子が立ち止まる。何かに興味を引かれて、体をゆすっていたり指を動かしながら、一生懸命、ずっと何か、立ったままじっと見つめています。その間かみさんは絵を描いていたたり、私は写真を撮ったりしています。そしてまた子供が歩き出したら、親たちも自分の作業を止めて、そのままあとをついていくと。

渡部／

途中途中で差し挟まれている、息子さん以外の風景っていうのは？

千葉桜／

はっと思ったら、そのまま歩きながら一瞬だけ止めて撮るということが多いかな。あと息子が見ていた、あるいは見ていたであろう、の風景は撮ります。

渡部／

確認しているっていう感じ？

千葉桜／

それはあります。

渡部／

分からないからこそ、息子が目にとめているものは撮っておくと。

千葉桜／

息子の見ていると思われるものはまず撮ります。あとで焼いている時に、写真の方からいろいろ教えてくれることがたくさんあるんです。こういうことを見たかったんだねとか、これは何でもないように見えるけど結構存在感があるなとか。

渡部／

焼いているって彼は言っていましたけども、今はデジタルの時代ですけど、フィルムで撮られていて暗室で1枚1枚プリントするっていう作業をしています。

彼がすごく面白いことを言っていたのが、仕事の終わり平日の晩に暗室に行って、これはレンタル暗室、暗室を貸してくれる場所があるのですが、そこに行ってプリントするのがすごく楽しいっていうか、落ち着くっていう言い方をしました。

どう、プリントはもうかなり焼いているよね？

千葉桜／

子供が落ち着いている晩とかで黙々と焼いています。どんどん焼いていると、だんだんダークルームハイになってきて、一種のマインドフルネスに相当するものでしょうか。

渡部／

写真やってない人も、ちょっと分かると思いますけど、印画紙っていうのは現像液につけると、じわりじわりと絵が出てくるんですね。それ、本当に何秒とかきちんと決めて、淡々と処理をしていくっていう、あまり何かそこに特別な処理とかって、実はなくて割と単純作業だよ。その単純作業をずっと繰り返していくと彼が言ったように、気持ち精神的な感じがちょっと変わってきます。

パソコンに向かって集中するのとは、全く反対の集中の仕方みたいなのが、プリントの面白さだよ。

千葉桜／

そうですね。私自身の普段の仕事がパソコンの前でやっているものなので。それとは全く違う頭の使われ方ですよ。こちらも疲れるには疲れるんですけども。

本当に反対の疲れ方をしますが、これ、なんだろうな、一定にスーッと上っていくような疲れ方なので、頭が抜けてスッキリするような感じですかね。

その後のビールがおいしいです。

渡部／

これは相当をプリントしたよね。

今日彼の写真をずっと見ていて、この展示の並びとか写真集の構成をしたのは、僕ではなくて、カロタイプのマネージャーで写真家でもある森下大輔さんと一緒にずっとやってきたんですよ。カロタイプって、貸し暗室の名前なんですけども、そこでずっと森下さんと一緒に、セレクトをしながら。何百枚くらい焼いた？

千葉桜／

これら展示の写真より、もう少し小さい6つ切サイズ、A4サイズくらいのを、ここ4年ほどで800枚ぐらいです。

渡部／

時間的にも相当時間がかかることで800枚焼くっていうことはもっと膨大に撮ってないとね。フィルム数百本取ってないと出てこないもんね。

数えたことはないんだろうけど、数えた方がいいかもしれないね。

千葉桜／

確かに数えたことはないです。

渡部／

フィルム1本でだいたい1000円近くするんです。

ちょっとなぜデジタルじゃなくてフィルムを使っていたの？

千葉桜／

きっかけは渡部さんのワークショップで暗室やっていたからです。

渡部／

ワークショップっていうのをやって15年くらいやっているんですけども。

以前は暗室があって、フィルムで撮ってプリントするっていうことをずっとやっていたの

ですけれども、なぜ来ようと思った？

千葉桜／

渡部さとるさんの本「旅するカメラ」（エイ文庫1～4巻、是非オススメ！）というのがあって、その1巻目の最後にワークショップのことが書いてあって、その写真も掲載されていて。何かその、こじんまりとアットホームな感じがあるのに惹かれて。またフィルムでちゃんとプリントするのがいいなと思った。

私自身写真撮るようになった当時はフィルムしかなかった。コダクロームとかリバーサルフィルムで、自己流でやっていました。当時写真学校とかいうのは、そのころの写真の世界はまず雑誌から来ていて、ともかく街に出て知らない通行人とかをバチバチ撮れ！という雰囲気でした。それで、私には聞こえないこともあって、ちょっと無理かなと思った。

渡部／

20歳くらいだから、1980年台ぐらいっていうのは、、、写真はもうほぼジャーナリズムかコマーシャルって言われているもので、自分の表現手段としてはまだそんなに多くはなかったので、学校もそのどうやったら人に物事を伝えられるかっていうことばかりやっていたっていう時期ですよ。

今回の写真、ちょっと自分の感想も入ってしまうんですけども。

最初に彼が私のワークショップのグループ展に来たときのことをすごく覚えています。自分がやっているグループ展に来て、写真がやりたいんですけども、耳が聞こえません、で出来ますかって聞かれて。できんじゃない？って、いう安請け合いに近い形で、彼と一緒に始めることになって、そのワークショップが終わった後にグループ展をやった。そのときのタイトルも今回の二コンサロン展示と同じですよ。

息子さんを扱ったもので、それをなぜ撮るきっかけになったかというところ…

最初は息子がいるからなかなか写真が撮れない、常に息子と一緒にいる必要があって、作品ってまでのものが撮れないんですけども、息子から目を離すといなくなっちゃうから、必ず見てなきゃいけないんですよ。

じゃあ、ともかく目の前のもの撮ればいいじゃんっていう話をして、息子さんを撮るシリーズを始めた。そのグループ展の時は、見つめている息子さん自身と息子さんの見ているものっていうものを構成していた。交互に、風景が映っていて息子さんが映っていて。

それが最初のスタートだったですよ。

自分のとこでやっていたっていうこともあったので、フィルムを使ってカメラもちょっと普通の皆さんが知っているカメラより大きい、マキナ67というカメラです。サイズもちょっと変わったカメラなんですけども、携帯性が良いっていうことで、そのカメラを使わずずっと撮っていた。

そろそろお分かりかとも思いますが、この風景っていうのは、彼が決めているんじゃないですよ。これを撮ろうと思って撮るといよりも、まず息子さんが見ているものを撮る。息子さんは息子さんで撮られていることも全然気にしてないですよ、これ。

千葉桜／

息子は今までは周りのことは関係なく、もう全く自分のペースだけでした。でも、最近は

ちょっとカメラを向けるといきなり振り返ることもあり、そういうのを少しずつ意識し始めるようになってきましたね。

渡部

普通、人物の写真を撮るっていうときは、撮られる人と撮る人の関係性とかって出てくるんですが、実はこれが切れているんです。

息子さんが気にしてないですから。撮られていること全く気にしない状況っていう人物。普通はできないんですね。だって撮られていると分かったら、まず何かを意識するじゃないですか。ちょっと良く見せようとか。撮られているんじゃない、こっちこうしようかなとか思うものなんですけども、何も持ってなくて。

また風景も彼が決めたものでなくて、彼の面白いのが、意識っていうよりも何かそこにあるものをただ写し撮っているだけっていう感じがすごくあって。

これ、今自分が一番気になっていることなんですよ。

何かそれまで写真を撮っている人って、自分の意思とか言いたいことがたくさんあって、それを世の中にどうやって発表するかっていうことを僕らは訓練付けられたとか意識づけて生きてきたんですけども。もしそこがもう結構限界に来ているってずっと思っていたときに、この写真を見たら、そこがもう、ぱさっと切られていて、はい！ただそこにあるものですよっていうものが写真から見えるんで。

彼の耳が聞こえないとか、息子さんが自閉症であるとかっていうこともまったくバサッと切って写真だけ見て、ちゃんと見られるっていうのがすごく面白いのと、これシャッフルっていうか、例えばすごく考えて展示してあるんだと思うんですけど、多分今すぐにバラバラにしてもう一遍組み上げても組み合っちゃうのを感じます。

そういう写真の、もしかしたら、これが写真の持てる一つの大きな力じゃないかっていうのが見えてきました。何か自分のことを伝えなきゃいけないとか、自分が自分かっていうのがこの写真の中ではなくなっていた。

だから最初にそのグループ展をやったときも、これすごくいいからっていう話をしたのは、そこが切れていたところがすごく面白くて、これって意外とすごいこと言っていますよ。意外と写真の本質みたいなもので。なんか個人的なものをどうやったら、意識とか、自分の自我みたいなものを外せるかっていうのを、写真家の人って考えているもんなんですけど。期せずしてなんかできちゃっているところがある。

多分この背景を知らないで見た写真の関係者とか、写真を全然知らない人であっても、何か感じるって言い方使いたくないんですけども、あるような気がするんです。

なんか、写真集の帯に。言葉になる前の風景だけ？っていうようなのが書いてあったけれども、何かその言葉に言葉で物事を決める前に…

これは人です。

これは風景です。

とか決める前のものがここに写っているような気がしています。

千葉桜／

息子自身は、例えば、ようやく「山」という言葉はわかってきたかな。でも実際は別の山だったらやっぱり多分わからないかもしれない。私達は「山」と言うと、インプットされているデータベースから山という概念で理解する。

いまだに息子にとっては、同じ「山」であっても、それぞれのただの風景であるような気がしています。「山」という言葉から入っているのではなくて、ここに展示されている写真そのもののまま。1度見つめ始めると、10分、15分とか、時には30分とか。

結構長い間じっと見ている。

渡部／

もしかしたら、じっと見ているっていうのは何かあるんだろうね。

千葉桜／

何か。音かもしれないし。

渡部／

親はわかんない

千葉桜／

見えないものかもしれない。とりあえずそういうときは写真を撮ります。

渡部／

彼のこの風景、僕はこの人物もいいけど、この風景がすごく好きなのは、何か特定の物を写そうっていう意識がない風景ばかりで、最初はなんでって話をしていたら、いやこれは息子が見ているから何見てんだろうなと思って撮っていましたって、いう言い方をしたんで、なんか自分が決めない風景の撮り方としてはとっても面白い。

写真をね、やっている方たくさんいらっしゃると思うんですけども、みんなそれを実はやりたがっているところがあって、どうやったら自分が決めないで写真を撮れるんだろうって、悩んだりするんですよ。不思議なことに、何か写真家って。

この一瞬とかっていう言い方をし、ニコンってそういう事いうんですけども、なんかそっちからもう離れ離れようとしているところがすごくあるんだけども。

それで息子さんがその物事を言葉で理解しないで見ているものをそのまま記録しているのが、この写真の面白さだと思っています。

千葉桜／

とはいっても、実際撮っていて、全部がそういうふうにはならないですよ。

全部はそうならない。だいたいはだめなんです。

渡部／

約束事っていうかね、うまく映る。特にフィルムなんで、どんなに面白いシーンであってもフィルムにきちんと記録されてなければプリントできないっていう制約がすごくありますけどね。

千葉桜／

たまにはちゃんと撮れたなと思った、いわゆる良い写真も始めはいいんだけど、ずっとみているとやはりすぐだめになる。

渡部／

なんかやったって思う写真は大概つまらないってところはちょっと面白い。何かうまく撮れたってというのはだめな写真って多いよね。これは割とレベル的に言うとかかなり上の方の話なんですけども。

撮れるようになるのにまずすごく時間がかかって、撮れるようになってくると、逆に撮れるようになっていったことをどうやって捨てるかっていうことを、すごくみんな悩むんですけど、この写真展の場合はもう彼の息子さんのおかげでそれを越えることができたっていうことですね。

ところで、何で写真集まで作ろうと思ったの？

千葉桜／

二コンサルオン審査を通過した時に、森下さんから自分の写真集出した時に立ち上げた写真集レーベル「asterisk books」の元で、写真集を自費出版してみませんかとすすめてくれたので。その森下さんの写真集を制作した際にお世話になった印刷会社やデザイナーの方々にも私の写真を見てもらって、とてもいいね！これは絶対いい写真集になると言ってくれました。森下さんには、カロタイプで焼くようになった2年ぐらい前から一緒にプリントを見てもらってきた経緯があり、私とのコミュニケーションにも慣れていたので、編集の方もお願いすることになりました。

また私が思ったのは、息子が今養護高校3年生なんです。学校教育が終わってこれからの生活が激変に変わる、丁度大きな過渡期なのです。こういうタイミングもあって、ここで1度写真集を作ってみようかなと思いました。

あと私は昔から写真集がとっても大好きで、本棚からあふれて山積み状態になっているぐらいなのです。私自身が写真集を出してみたかったというところもありました。

渡部／

特定のストーリーとか意図とか、作者の思いとかがってよく言うんですけど、ないですよ？ほとんど、なんか見る方、見ている方の面白さとしてはそんなもん、結構省いてみた方が面白っていうのがあって。彼は耳が聞こえないからというのもあるかもしれないけど、多分それができていたのかなって感じがしますね。

写真集見るって結構やっぱり結構知的なゲームというか、面白さがすごくあって、答え合わせをしない面白さ。何かこの作者はこういうふうに言いたいんだろうなんていうことを答え合わせをしないで、見ていく自由さがあって。

なぜかという、言葉で全部説明されてないんで、言葉で説明されたらそうじゃないとかって言いづらいんですけども、言葉で説明してない分だけ、どういうふうに見てってもいいし、ひっくり返して後ろから見ていてもいいし、だから彼の写真集も本当に、さっきも言ったけど、彼の背景とか息子さんの背景とか全く切り離してばらばらに見ていっても、ちゃんと面白く見られる本になっていると思います。

今何分？40分、あと10分。最後に、入ってきますけどもねえ。
そうだね・・・作ってみてどうだった？写真集を作るって大変だったでしょう。

千葉桜／

このニコサロン展示が決まったのが、1月下旬ぐらい。それから3ヶ月くらいは展示の準備もしなければいけないし、写真集の方はこの展示したもののプリント並べで単純にやろうかと思っていたけど全然だめだった。先ほどの森下さんにもやっぱり入れ替えもした方がいいと言われた。

なので、1枚の写真としてはすごく良くても展示に洩れてしまったのも入れています。展示にはこの写真とそれに続く写真もあって、ぐるりと長い目で見ることができけれど。

渡部／

展示はですね、壁で見てくるんですよ、皆さん。

壁があって壁があってって見ているんですけども、写真集って開くでしょ。そしたらそこには、最大で普通に2枚しか載ってこないんです。普通の写真集は、ちょっとその2枚って世界だけをずっとこう繰り返すだけなんだから。壁で超えてみると隣が見えますけれども、写真集は隣が見えないですよ。当然ながらめくるとみんな忘れますから。そんなに物覚えよくないんですぐ忘れる。すぐ出てきたっていうのはずっと見ていく作業になってくるんで。

当然ここの展示場所で飾られているものと、写真集の構成っていうのは全く違うものになるってことに気がついてしまったわけですね。

千葉桜／

すごく大変だったけれども、写真集を作るのは面白かったです。

展示の場合は、様々な制約があるんですけど。写真集の場合はそれに関係なくできる。展示の場合は全体を見て流れを考えなければいけない。写真集の場合は1枚1枚の写真を見ているみたいなのがある。

渡部／

開いたところしか見られない。

千葉桜／

私は展示もよかったのですが、それ以上に写真集を作る楽しみの方が大きかったかもしれません。

渡部／

ニコサロンは当然皆さん知ってらっしゃると思うんですけども、非常に歴史の古いギャラリーで、ここで写真展をやるっていうのは、ものすごい目標だったところでもある。今でもやっぱり銀座のこの一等地で展示ができるっていうことは、かなり倍率が高く、ここで展示するのはとても難しいんです。

もう4年ぐらいでここに展示することができ、写真集も作れて、ものすごい短期間に急速に写真の階段が上がったという感じがしますね。この感覚で4年5年ではなかなか、4年っていうとね、大学一年生が卒業するぐらいの期間でしかないのに、そこまで来れるのっていうのは、やっぱりちょっと才能というか、写真に向いていたっていうのがあるんだと思うけどね。

本人はずっと淡々とこうやっているけども、最初に見たときから、たぶん森下さんもすぐ

わかったって言っていたのも何かあるんだろう。それは自分の耳が聞こえないっていうことも関係するかもしれないし、集中度が聞こえない分だけ、この写真の方に向くっていうのもあったかもしれないし、まっ、それはちょっとね、わからないんだけども。

でも結果的には非常に良いものができたと思っています。

千葉桜／

ありがとうございます。

私自身は今の仕事を始める前は自然環境調査をしていました。道路とか住宅開発の前後で調査を行う作業などです。

現場に行く仕事です。コニカの現場監督くんって知っていますか。工事用のカメラがあるんです。美しくよい写真を撮るってよりは、単に仕事の証拠写真などを撮るだけなんです。例えば道路のいろんな状況の記録として残すためとか。その時の写真とかも多分ここに影響しているのです。何でもない写真を撮るっていうのが私の中ではあるかもしれせん。

渡部／

それって調査だから自分の意思とかではなくて、条件づけられたものを単に撮っているってことだと。淡々と淡々とね。

千葉桜／

その頃撮っていた写真も結構いいんです。

渡部／

知らず知らずのうちに訓練されていたっていうようなものだけど、本当もうただ撮っていてとだけで何も感じてなかったのでも、それだからこそ、やっぱりしみつくんだよね。

千葉桜／

そのときは仕事で撮っていただけで何も考えていなかったのですが、あとあとなくなっちゃうものって、何かそこに特別なものがないかと考えてしまうと、撮れなくなるって状態になります。

渡部／

そこをどうやってみんな変えられるかってすごく悩むところなんだけど。初期の訓練みたいなのは、ちゃんとあったんだよねそこにね、多分。

千葉桜／

今の写真もスタイルやテーマをどうのこうの...と考えている余地がないのです。撮れなかったら、それはそれでまた撮ればいいやということです。この間、渡部さんにもうちょっと続けて何枚か撮らないのかといわれたのですが、1回撮ってみてダメだったら、もう撮らないということです。

渡部／

それは縁がなかったから。たくさん撮って形にしようっていうんじゃなくて、撮ってみてなんか駄目だったら、いやこれは縁がなかったからいいよねっていう心理状態ですね。

千葉桜／

私の場合はそうでないと、逆に撮れなくなってしまうんです。

渡部／

写真家がすごくやりたがっているようなことを、彼は何か訓練されていたところがありますね。

本当に今、この展示写真は今の時代にとってもあっていると思います。

それでさっき写真集すごく勧めたのも、何かあるかもしれないよって話をしていたのもそこなんです。いろんな写真家がいろいろやってなかなか上手く乗り越えられなかったところをいろんな経験がそれを写真として乗り越えさせてくれたような感じがします。

渡部／

はい。ずっと質問のある方がいたらぜひ聞いてください。

質問N／

よろしいですか。Nと申します。今日はありがとうございました。

すいません、写真をこう並べるときの選択、はどの基準で選ばれたのでしょうか？

この写真だっていうふうにご自身で選ばれるときの基準はどういうふうな。

千葉桜／

まず一つ、自分の作為が入ってしまっている写真は除くようにしました。私以上に森下さんが作為入っているものは省こうとしている。それでも無意識にこれはいいと思うのがあれば、何度か一緒に見つめながら、それもありがもとなればやっと入る。

ただ私の場合は単に歩き回っている中で撮っているだけなので、そもそもあまり変化がない方だと私は思っています。だから渡部さんが言っているように、写真入れ替えてもあまり変わらない。写真展と言えば順番通りに並ばなければいけないかもしれませんが、私の場合は全部同じなので。あと最終的には、自分が納得して選んだという意識を持つようにしているのはあります。

渡部／

とても面白い。本とかで大事な質問での大事な答えというか。なんかよく映っているもの選ばないっていう。

ある意味、分からないものを選んでるって感じですね。よく撮れているっていうのは、こうやったらうまく撮れるっていうのはなんとなく訓練を積んでいくと、できるようになるんですね。だいたいここを撮るとこんな感じで撮るとうまくいくなっていうのは訓練でできるんですけども。

それができないのが、分からないものを撮るっていうのが一番難しいっていうか、一番できなくて、分からない方が面白い。後々感じる人が多いですね。何かよく撮れたものっていうのはさっき彼も言ったけどだいたい、しばらく見ていると飽きちゃうものなんだけども。分からないものに関して、分からないってことは理解できないんで、ずっとそれを見ていられるっていう特質があります。

千葉桜／

それでも私の場合は、そもそもストレートな写真なので、極端に分からないものというのではないと思うんです。

質問H／

おめでとうございます。

今、千葉桜さんが写真展を、この写真展を見て本当にありのままの自分の気持ちが伝わってきました。すごくすばらしいなと思っています。

一つだけ、知りたいことがあります。今の世界から、今だとカラーの写真っていうのが多いと思うんですね。ここの写真はモノクロですよ。

モノクロだけで気持ちを伝える。そこは素晴らしいなと思っているんですけど、なぜなのでしょう？モノクロにこだわった理由を教えてくださいたいと思います。

千葉桜／

別に最初からモノクロにこだわったわけではないです。

ただ暗室を体験すると分かるのですが、モノクロは赤ランプ下ですがカラーの場合は本当に真っ暗になります。

聞こえない中で、補聴器を使っているんで、真っ暗というのは何も見えないので、怖いとまではいかないですけども、それが3時間5時間となると落ち着かなくなるのです。

渡部／

映画か何かで見たことある人もいらっしゃると思いますが、赤いランプがついていればだんだん目が慣れてきてずっと見える状態になるんですけども。彼の場合はそのランプも影響してくるので、本当に真っ暗の中で作業しなきゃいけなくなると結構大変なんですよ。最初にカラーもすすめたんですけども、いやカラーはちょっと暗室のことがあって何かあんまり好きじゃないって言って、モノクロになったってのがありますし、何よりもモノクロのプリント作業が好きだった。

千葉桜／

モノクロの場合、赤ランプだから現像したときにフワッと像が上がってくるのが見える。その瞬間、写真の方から近づいていろいろ語りかけてくるというか、たまに。

そういうときがあると。

渡部／

天才だって思うよね（笑）

千葉桜／

はい、その瞬間だけは（笑）この時ばかりは自分天才かなって思えるんですけど、水で洗って乾くとがっくりと（笑）

でもその瞬間があるから、その行為をずっと続けられる一つの力になっています。

もし簡単で便利にすぐ結果が出るっていうものだと、ここまで続かなかったかって思うことがあります。

あと、息子が水に対する愛着がすごく強くて。水はモノクロの方が綺麗に見える、実はモノクロの方が水の表現ができるのではないかと。水の表現だったらやっぱりモノクロかなと私は思っています。

渡部／

他にどなたかいらっしゃいますか。

質問K／

初めましてKと申します。

知り合いの方に教えていただいて、きょうはこちらにお邪魔しました。私は実は弱視の視覚障害者でして、それで写真展は、私はここ数年でちょっと輪郭等が見えなくなってきました。視野の中心が見えづらくなりまして、文字や顔の認識が出来ない状態です。

ですので、写真はよく見えないんですけども、今お話を聞いていまして、作為的でない風景ですとか、自分が自分がというものをこもっていない、映像というのがどういうものなのかなと知りたいと感じました。それでもし可能でしたら、写真集を作られる際にその風景の言葉の描写みたいなものを入れていただけないかなと思ひまして、今手を挙げさせていただきました。

ご検討いただけたらと思いますのでよろしく申し上げます。

千葉桜／

ありがとうございます。それはとても大事なことです。

実は私の母が網膜色素変性症という目の遺伝性の病気にかかっている、どんどん視野が狭くなって最後は全部見えなくなってしまいました。そのときに何が見えている、何があるかと説明を求められて、一つ一つ説明していたことを思い出しました。

そして、それは物事をよく見る機会にもなるんだと気づかされました。

これは、例えば美術館の絵を見る時にも役に立っています。ありがとうございました。

渡部／

じゃーそろそろ時間、はい。どうも皆さんどうもありがとうございました。